「壁」から「道」へ

言の葉大賞®実行委員長　柿本遼平

二〇二〇年第十一回のテーマは「壁」でした。作品に描かれた、自分の前にある壁をどのように自身で乗り越えるのかの葛藤と、その渦中で支えている方々の姿が今でも記憶に残っています。そして、第十二回のテーマを考えた際、壁を乗り越えた人はその後の人生でどんな道を歩むのだろうかと興味が湧きました。

「道」とひとえに表しても、様々な視点から表現される「道」は、一人ひとりが歩む道のりと、これからの未来への道筋が、個性豊かに表現されたストーリーになっていて、とても楽しませてもらいました。すべての作品について言えることは、読み進めることで情景描写が浮かび、読んでいる私自身がまるでその場に身を置いているように感じられたことでした。それぞれの人がこれから進みたい道が、作品に明確に描かれていたからだと思います。

多くの作品の中から浮かび上がってくる、印象的な三つのテーマがありました。一「人生における道」、二「日常の中にある道」、三「武道や芸道を通して学んだ道」。一つ目のテーマについて書かれた作品では、「経験」の中に生まれる苦楽に悩みながらも、解決の方法を見つけて前を向いて歩いていく姿が描かれていました。二つ目のテーマでは、「日々の生活」の中で当たり前にある人や物事の姿をじっくりと振り返ったり、それにあらためて向き合ったりすることで見えてくる景色が、情感的に書かれていました。三つ目の意味での道は、「芸道・武道」の習得を通して他者に対する礼儀や関わり方も身に付けることで、自身の成長を感じ取る姿勢の大切さを教えてくれました。どの「道」について綴られた作品にも、どの年代においても大切な学びと気付きがあり、そしてそれらはどの人にとっても、かけがえのない人生の一ページになっていることを感じました。

最後になりますが、今回の作品が教えてくれたのは、どんな「道」でも自分自身で切り開くことが大切であるということであり、周りのサポートを受けた際は感謝の心を忘れずに前に進むことで、はじめて「個」が確立することを忘れてはいけない、ということでした。